紹　介

三品先生還暦記念　日鮮古史彰考

本書はこの七月還暦の賀寿を迎えられた三品彰英博士をお祝いして、博士と平素近しい間柄にある方々が博士に献呈された論文集で、とくに朝鮮学会の好意によって『朝鮮学報』第二四号がそれに充てられ、その別刷として本書が発刊された。

朝鮮史の研究が、それ自体としては勿論、日本史の立場からも極めて重要なものであることはいうまでもない。ことに日本の古代史の解明には、楽浪・帯方郡治につづく百済・新羅・高句麗についての充分な理解がその前提として是非必要である。遣隋使・遣唐使が往来するようになってからは、大陸文化は直接中国からもたらされたが、それ以前はもつぱら三国を経由して日本に渡来した。従って古代の日本は政治的・社会的・文化的、いずれの面においても三国の影響を受けている。しかし筆者自身がそうであるための偏見かも知れないが、最近の日本古代史家は、右の自明の事実を充分に承知しながらも、古代朝鮮について深く探究しようという意欲には欠けているように感じられる。それは戦後における朝鮮そのものの政治的変化、つまり現実的な日本の支配からの独立が、学問の上でも日本史の領域から朝鮮に関する研究を敬遠してもよいというような錯覚を惹き起したからかも知れない。確かにこの方面の研究に従事する若い研究者が近ごろ乏しくなってきたのは事実である。多年朝鮮史の研究に心血をそそぎ、多くのすぐれた業績をあげて来られた三品博士は早くこの傾向に気付いて、その学問の将来に深い憂慮をいだき、その打開に志された。本書の巻末にその活動状況が報ぜられている朝鮮研究会・三国遺事研究会・日本書紀研究会の三研究会はいずれも博士のそういう配慮のもとに発足したものであり、どの会でも自らが卒先して若い研究者の誘掖に当っておられる。博士は目下新設された大阪市立博物館の初代館長の要職にあって、その方面の仕事にも極めて多忙であるに拘らず、益々朝鮮史の研究指導に精進しておられるが、本書は正にその精華の一面であり、博士自らがその巻頭に高論を寄せておられるところに、還暦を迎えていよいよ意気旺盛な博士の面目躍如たるものがある。

収載された論考はつぎの九篇である。

百済記・百済新撰・百済本記について　三品　彰英
鉄盾考　小林　行雄
新羅王都考略　村上　四男
古代朝鮮の文化境域―三国時代地名語尾からみて　井上　秀雄
三国遺事百済王暦と日本書紀　笠井　倭人
大化前代における朝鮮派遣氏族の研究　上田　正昭
高麗歌謡試論　玄　昌厦
近代日朝関係の一考察―ブルジョアジーの対朝鮮政策を中心として　湯浅　晃
同義語叫対社一考察　青山　秀夫

三品博士の論考は、日本書紀に引かれている百済関係の三書の性格とその成立年代を論じたもので、書紀研究にも重要な提言をなしている。すなわち百済新撰は他の二書と性格の異なる別系統のもので、不明な点が多い

が、百済記は日本をさして貴国と称している点からも知れるように、それは聖明王の戦死、任那諸国の滅亡、敏達・推古朝の任那復興計画と時勢の推移する時点において、百済が加羅問題を中心に日本との特殊関係を意識して撰述したものであり、百済本記もそれについて同様な傾向をもつもので、撰述時期は百済記は欽明――推古の間、本記は推古朝を余り遠く隔らぬ時期というのがその要点。この結論には先に博士の指導をえて発表された木下礼仁氏の「日本書紀にみえる百済史料の史料的価値について」（『朝鮮学報』二一・二二）なる百済記以下の三書の借音字の統計的研究が有力な傍証とされている。

他の諸氏の論考についてはすべてにわたつて述べる余裕をもたないので、古代史に関するものだけを簡単に紹介しておこう。小林博士の論考は石上神宮伝存の鉄盾の製作年代とそれが日本製か朝鮮製かの問題を慎重に論じたもので、「仁徳紀にいう高麗国貢献の鉄盾そのものであると断定する気はないが、これが五世紀ごろに製作されたものであり、古代において異国の工人の製品であると語り伝えられた可能性を、まつたく否定することはできない」と結ばれている。村上氏のは新羅の王都制について論じたもので、その六部は高句麗や百済が王都に五部制を施行したことの影響をうけて、六世紀に入つて間もなく施行されたものであろうことなどが述べられている。井上氏のは三国史記地理志にみえる地名語尾の用字から、それぞれの分布によつて高句麗・百済および新羅・加耶の文化境域を推定しようという詳細有益な基礎的研究で、その分布図と新羅統一時代の郡県図が挿入されている。笠井氏のは三国遺事の百済王暦に三国史記と異なる異伝史料のあることに注意し、それは決して錯誤ではなく、「正史編纂のまえに埋もれ去らんとした、貴重な古代伝承である」として、この点から継体・欽明両紀にみえる重出記事（仏教公伝年次・多沙津割譲年次・継体崩年年次など）がすべて明快に解釈できるとした書紀成立の問題にも及んだ重要な提言を含む論考。最後に上田氏のものは書紀にみえる朝鮮派遣氏族を整理し、それについて要説したもので、将来深化する必要のある問題として興味深い。

博士の還暦を記念しては、さらに最近博士の高著「日本書紀日韓関係記事考証」の上巻が出版されたが、これらが契機となつて博士の念願とされる朝鮮研究が一段と飛躍することを期待し、また博士が長寿を保たれていつまでも斯学のため御活躍されるよう祈念する次第である。

（A5判二三三頁　昭和三十七年七月　朝鮮学会発行　非売品）　（岸　俊男）

加計町史

広島県山県郡加計町は、太田川の上流丁川と滝山川の合流点に位置し、現在は国鉄可部線の終点にあたり、古来より安芸北部の中心地として発達し、近世では、「隅屋鉄山絵巻」が象徴するように、砂鉄精錬の中心地として著名である。この加計町の町史が、小倉豊文広島大学教授を監修・調整者とする、有元正雄・栗栖義典・佐々木盛房・末田尚・武井博明・土井作治・西村嘉助・畑中誠治・松岡久人・道重哲男・脇坂昭夫・渡辺則文各氏スタッフの前後十年にわたる苦心を経て、町史上・下二冊、同資料上・下二冊、合せて三二百余頁に及ぶ大冊となつてこのほど上梓された。本書を一読して何よりもまず敬服するの